国内研修報告書

まち側が移住者を選ぶまちづくり

・研修テーマ：まち側が移住者を選ぶまちづくり

・研修場所：神奈川県真鶴町

・研修期間：2025/2/9(日)～2025/2/11(火)

・研修参加人数：４名

ローカルイノベーション論を受講した際、真鶴町には地域独自の「美の基準」があり、それを元に地域住民が景観や自然を守り続けていること、そしてその暮らしに惹かれ移住者が増えていることを学んだ。住民の地域に持つ愛着や移住に興味がある私にとって、講義で学んだ内容やゲストスピーカー川口さんの話で出てきた「まち側が移住者を選ぶまちづくり」は非常に興味深いものであり、実際に地域住民の声を聞き机上では学びきれなかったことを知るために国内研修の制度を活用し真鶴町を訪れた。

研修期間中は、真鶴の住民と移住希望者を繋ぐ役割を担っている真鶴出版に宿泊した。真鶴出版は「泊まれる出版社」がキャッチコピーの民泊であり、まち歩きというプログラムを実施している。１日目は、まち歩きに参加した。真鶴の街を真鶴出版スタッフと共に歩きながら、地域住民と挨拶をすることが主な内容であった。多くの住民の方と井戸端会議を行い真鶴での生活に触れることで、暮らしという視点で真鶴を捉えることができ「真鶴で生きていく」感覚を理解した。それと同時に、観光という訪問者の希望に合わせた繋がり方ではなく、真鶴の暮らしに訪問者が溶け込むという繋がり方をすることが「まち側が移住者を選ぶまちづくり」であり、真鶴の暮らしに溶け込んだ人が移住してくることで移住後のミスマッチを減らすことにもつながっていることを学んだ。

２日目は、真鶴出版を運営している川口さんにお話を伺った。川口さんは、学生時代から東京に憧れを持ち東京の会社に就職をしたが、東日本大震災で被災した際、会社のビルの中で死にたくないと感じ真鶴に移住を決意したそうだ。移住先として真鶴

町を選んだ理由は、真鶴に定期的に足を運び人と繋がることで愛着が増えていったからであった。真鶴は人が温かく、人と関わることを大切にしており、移住者を歓迎する文化を持っている地域だと語る川口さんの姿から地域に愛着を持つ第一歩は住民に愛着を持つことであると学んだ。また、川口さんは真鶴で暮らすことに関して話を聞いていくと真鶴に移住したことで個人の暮らしが地域の暮らしへと変化したと語った。「東京では何かを変えたいと思った時変えられるのは自分の暮らしだけ。でも真鶴は余白があり関われる余地が多いから、自分が地域に入ることができる。住民の暮らしを考えることができる。」という言葉から、余白がある地域で生きる面白さに出会った。

ここまで話を聞き、私は真鶴町という一つのコミュニティを理想郷のように感じた。まちに選ばれた移住するべき人が移住する仕組みは、間違いなく移住の成功例であり地域に対する愛着や移住者を受け入れる風土、豊かな自然や特徴的な「美の基準」に沿った暮らし等評価する点ばかり見られたからである。しかし、私が理解してきたものは一部の移住者の声なのではないかと考察し、他の移住者や真鶴で生まれ育った方にもヒアリングを行いより多角的な視点から真鶴を見ることとした。よって、３日目に計画していた中川一政美術館への訪問の時間を地域住民へのヒアリングの時間へと変更した。

２日目の午後は、自主的にまちを歩きすれ違う地域住民にヒアリングを行った。真鶴に 50 年間住み続けている 80 代の女性と地域で和菓子屋を営んでいる真鶴で生まれ育った 70 代の夫婦に真鶴に対して思うことを聞いた。すると、移住者に聞いた話とは全く異なる意見を聞くことができた。彼女らは人口減少による地域の活力の衰退や古くから続いていた商店が消えていく寂しいと語った上で真鶴という地域の住みにくさを教えてくれた。真鶴町には「瀬戸道」と呼ばれる人 2 人分ほどの幅の狭い坂道が数多く存在する。かつて漁師であった人々が港付近の土地に密集して家を建てたことで生まれた家と家の隙間の小さな道である。この瀬戸道について講義や移住者からは「井戸端会議が生まれるきっかけを生む道」「真鶴の美を感じられる道」と評価されており、実際すれ違う人にヒアリングをする中でも通行人の物理的距離が近くなることで会話が生まれやすい道であると感じた。しかし、実際に住んでいる高齢者からすると「坂道が多く手すりもないため歩きにくい」「狭い道のため救急車や消防車が通れず不安」という声が上がった。かつて漁師であった人々も今は高齢者となっている。歩いての移動が難しい人が増加する上で、家が密集しているため取り壊せない空き家も多く、港周辺の地域は閑散とした雰囲気が漂っていた。この話を踏まえて、川口さんは真鶴には余白が多いと話をしていたが、それはソフト面での話であり高齢の住民にとってはハード面で抱えている課題が多いことが分かった。しかし、これほどの課題がある中で彼女ら高齢住民は真鶴に住み続けている。その理由はこのまちで暮

らすことが当たり前であるからだ。また、移住者が増えることや美の基準を守ることに彼女らは大きな思い入れはないと語る。その理由も移住や美の基準は自分の生活の当たり前であるからであった。当たり前と感じることは無関心なことではない。移住や地域独自の特徴、不便さといった外からは目を向けられるものが真鶴では地域に溶け込んでいることを表しているのではないかと考察し、そのような特異なものが地域に溶け込んでいるからこそ移住者を受け入れる風土が真鶴には根付いているのだと感じた。

３日目は、コミュニティ真鶴という子供の放課後居場所支援を行う施設に出向き、子育てという人生に大きな影響を与える時期に真鶴への移住を決断した方にお話を伺った。[1]国士舘大学の調査によると出産後の住居選択において重視する項目は利便性や夫の通勤時間、日用品の購入のしやすさ等「住みやすさ」が重視されていることがわかる。しかし、子育てのために移住をした二児の母の女性は「不便であること」に魅力を感じて移住をしてきたと語る。不便だからこそ生まれる自由な余白を大切にしているのだ。電車のあまり通らず買い物をする場所も少ない。道が狭いため徒歩移動を強いられる真鶴は決して便利で発展した地域とは呼べない。しかし、彼女は一般論とは異なる自分なりの魅力を見つけ真鶴に移住を決意した。住民と深く関わり支え合いの意識が強い真鶴は彼女にとってはとても住みやすいまちだと語っていた。これらのヒアリングを通してどんな地域にも良い点も課題点もある。しかし、必ずしもその課題点を解決する必要はなく、課題を受け入れて生きていくという生き方やその課題に惹かれる住民がいること、そしてそれらの住民の考え方や生き方を尊重し地域に溶け込ませていくことがまちづくりにおいて大切であることを改めて学んだ。

この３日間の研修を通して、移住者の増加に成功した理想郷のようなまちだと思っていた真鶴へのイメージは変化し多くの課題や不便さも抱えるまちであることを学んだ。しかし、それでも住民がその不便さを日常だと感じ受け入れたり魅力だと感じたりする理由はやはり地域住民の繋がりが深いことではないかと考察する。真鶴で過ごした三日間で多くの人と人との繋がりに出会った。例えば、地域の和菓子屋で今川焼きを購入する際、必要最低限な会話に加え「今日寒いですね」と小さなコミュニケーションが生まれていた。定員と客としての関係性ではなく、人と人としての繋がりが深く「自分」に向き合ってくれている感覚に人々は不便さ以上に心地よさを覚えると考察する。まちに惹かれ、まちに選ばれ移住者とそれを当たり前のように受け入れる

---

[1] 寺内義典　居住地周辺の子育て環境についての意識と居住地選択　国士舘大学理工学部紀要第４号（2011）参照日 2025/2/24(火)
file:///Users/anna/Downloads/1882_4013_004_05%20(1).pdf

住民がつくる真鶴は地域の１番の資源とは人であるということを思い出させてくれる場所であった。